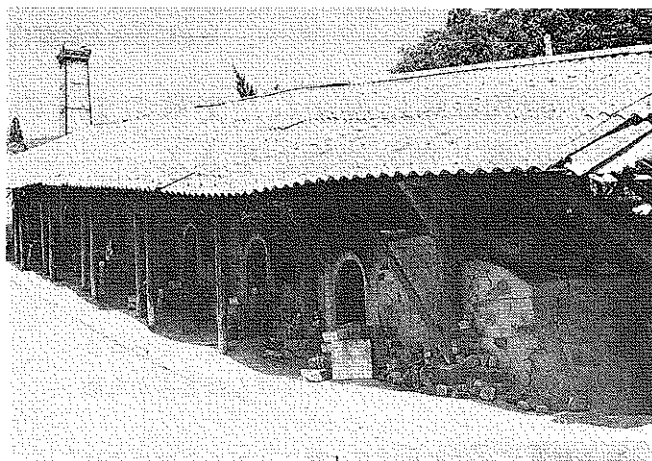


# よか ネット

YOKANET

NO. 17 1995. 9

(株)九州地域計画研究所



小鹿田のまん中にある大型の登り窯。8室で構成されており、昔は全戸でこれを使って焼いていた。今では5戸の共同窯となっており、下から順ぐりに使う窯の室が上へ移っていく。(本文2頁)

## も く じ

### 〈NETWORK・ネットワーク〉

2. やぶにらみ九州論 12 昭和6年に書かれた文章のままの風景と音と焼物が生きる小鹿田焼の里
7. おばあちゃんは満足してくれているだろうか～宇美町原田炭鉱住宅地区の改良について
9. 「幸せはガンがくれた」～地域ゼミから 川竹文夫さん
10. 『おい、こら！「21世紀がせまっとるぞ」』～地域ゼミから・大谷妙人さん
11. 「住み慣れた場所に小規模ホームが理想です」～WAC研究会から・下村恵美子さん

### 〈見・聞・食〉

13. 中国見聞食日誌 (住宅団地・北京ダック・中国の嘉穂劇場・タクシー運転手の立ち寄る食堂  
浦東新区工場団地・上海和平飯店オールドジャズバンド)
16. 食場日誌

### 〈本・BOOKS〉

17. 聞き書「福岡の食事」 「日本の食生活全集 福岡」編集委員会 編
18. 「夜はまだあけぬか」 梅棹忠夫 著

### 〈近 況〉

18. 私の近況／情けに報いる～豆田の街並み～小鹿田～大島紬の里～山笠
19. おしらせ／「うらしま太郎」を行ないます

やぶにらみ九州論12

## 昭和6年に書かれた文章のままの 風景と音と焼物が生きる 小鹿田焼の里

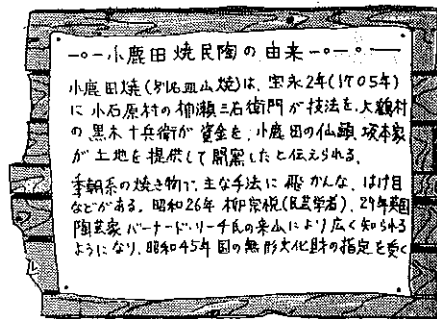
〈柳宗悦の文章にひかれて訪れた〉

私の小鹿田（おんだ）とのつきあいは、というより片思いのような関係は次の文を読んだときから始まった。

「峠を降りて村に入れば耳に聞こえてくるのは水車の響きである。焼物の土を砕くのである。音の間はいたく長い。大きな受け箱が少しの水を待っている。急ぐ用もないのである。待ちどおしく思うのは吾々の心だけと見える。だがこの緩かな音があってこの窯があるのである。もしせからしい機械が入って来たら、この村はたちまちつぶれるであろう。機械に職が奪われてしまうからである。狭い谿間は家の増えることすら防いでいる。早く機械が動いたなら生産の過剰に、たちまちものがはけなくなるであろう。この村とこの窯とは、待ちどおしい水車が一番仕事を助ける。」（「日田の皿山」柳宗悦民藝紀行①岩波文庫版より）

これは昭和6年に書かれた文章である。この文章を読んで、「この風景は今どうなっているのだろう」という興味をもったことが、十余年前に私を小鹿田に運んだのである。

小鹿田のことを書こうとすると、その前に私のイヤで僻みっぽい性格について述べておかねば悪いような気がする。この「日田の皿山」は私の友人が、「糸乗さんが読んだらきっと喜ぶと思う」といって上製

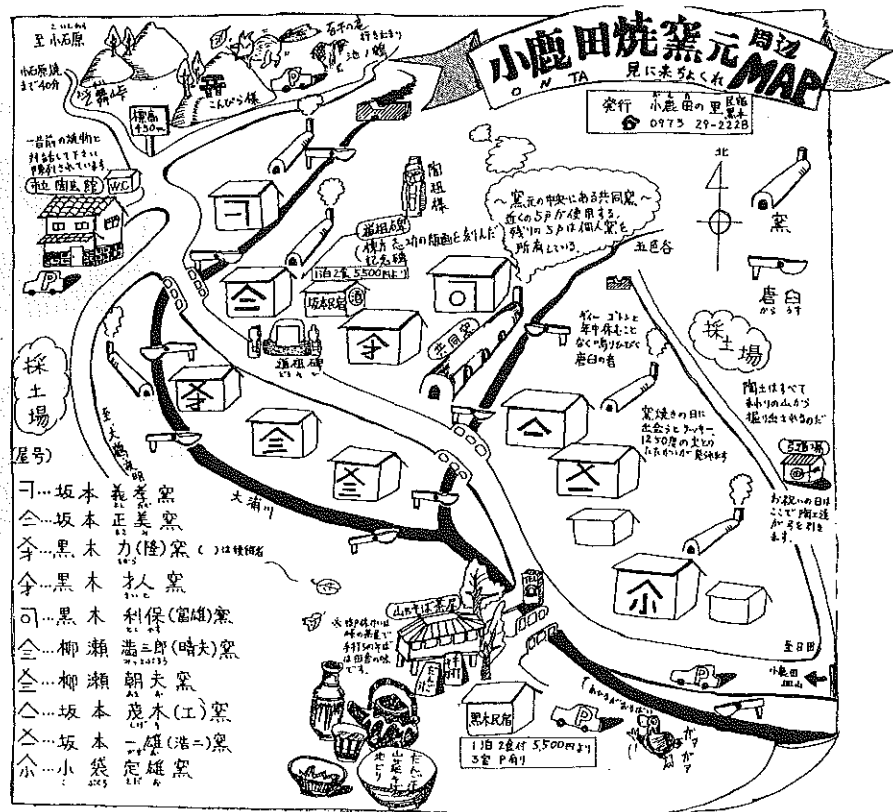


本の小冊子を和紙にくるんだまま貸してくれたのであるが、借りたままなかなか手が出せなかった。私は定説の定まった偉い人という、何となく近づく気がしない。そして柳宗悦はそんな人ではないかと思っていた。しかし、私のために思いついて、大切にしている本を貸してくれた友に悪いと思って身近においていた。読むまで1年ぐらいかかったように思う。

根性がまがっている上に、確たる信念などというものを持ちあわせていない私のことであるから、一読、柳宗悦に対する考え方が変わった。そして二十数巻の全集まで、買ってしまふ羽目に陥っている。

小鹿田の話にもどる。十数年前の夏、博多から久大線で日田まで行き、1日に2~3往復しかないバスに乗って終点の小鹿田についた。川沿いの狭い道路を登ってきたバスから降りて、つい数メートル前を見たら、「水車」と柳宗悦がいった、土を砕く水受け型の唐臼があった。そして、「音の間はいたく長」かった。

昭和6年に柳宗悦が書いている風景がそのまま私の前に拡がっていた。狭い谿間は家の増えることを、今に至るまで防いでいて、現在でも10戸の窯元しかない。



〈小豆田焼は柳宗悦に発見され広く知られるようになった〉

今から300年くらい前に、小石原の陶工が小豆田へ技術をもたらしたと伝えられているが、今でも陶土は裏山に豊富にあるといわれており、その土を求めてこの地で窯をつくったのかもしれない。小豆田の皿山には田や畑が一枚もあるようには見えない。ひょっとして山や谷をへだててどこかにあるのかもしれないが少なくとも10戸の暮らしを支えてきたものは焼物だけだったと考えられる。

それが柳宗悦に発見され、バーナド・リーチが訪れて作陶したりしたので世界的にも知られるようになり、昭和45年には国の記録保存文化財の指定も受けている。柳宗悦はその発見の下りを前掲の「日田の皿山」で伝えている。

「四年ほど前に戻る。私はかつて久留米の一軒の陶器屋で不思議な品々を見つけた。それはどうして今出来のものとは思えない。それほど手法が古く、形が良く色が美しい。或ものは遠く唐宋の窯をさへ想起させた。心を惹かれながらそれらの数々の物を棚

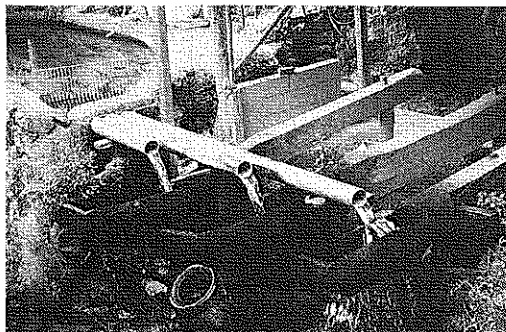
から下ろした時、凡てが同じ一つの窯で焼かれているのを知った。そうしてその窯が日田郡大鶴村に在ることを漏れ聞いたのである。それ以来その窯のことが心を離れなかった。……土地の人はそこを皿山と呼んでいる。この名は各地に窯を訪ねる人には既に親しまれている呼び名である。皿を造るところ、焼物の出来る場所、それを皿山呼ぶ。朝鮮でよく沙里（さり）というに等しい。日田の皿山は大鶴村に属し、小字は小鹿田である。不思議にもこれを『おんだ』と読む。」

ここへ宗悦は昭和初年に、日田から四里（16km）車で、あと二里半は山道を歩いて出かけている。現在、私が小鹿田へ行こうとすれば、福岡天神の事務所から車で2時間余で着く。おそらく、宗悦が山道を歩いた時間より短い時間しかかからないのではないかと思う。これほどに世の中は変わっているが、小鹿田の中は余り変わっていない。

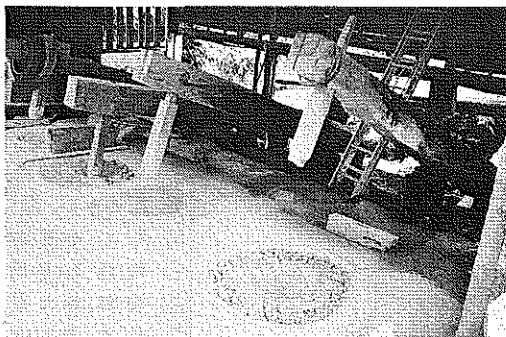
#### 〈昔と変わらない焼物づくり〉

この小鹿田を紹介する文章は極めて書きにくい。先日、前の焼物組合長の坂本茂木さんにお会いしたとき、私が「ここへ来たきっかけは、柳宗悦の『日田の皿山』なんですよ。」といったところ、「以前水上勉が来て『あれは日本の三大随筆のひとつだ』とっていましたよ」といわれた。

三大エッセイといわれるような文章が既にあり、今も里の風景も焼物づくりもそれほど変わっていないのだから、書きにくいのは当然であるかもしれない。どうか小鹿田焼の特徴などは柳宗悦の文章を参考にさせていただきたい。私は、知っている人にとっては分かりきっていることだと思うが、今でもこんな焼物づくりをやっているのかと思われるような、平凡な工程を説明する。

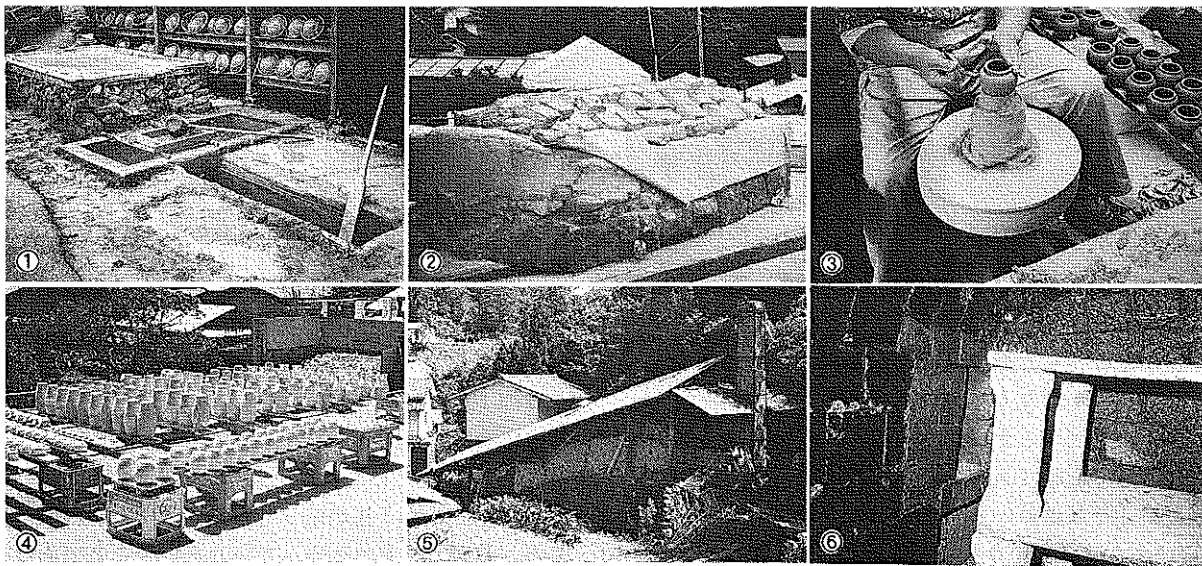


唐白の水を受ける部分



唐白の土を砕く部分

- ・土—宗悦が「裏山から取ってくる。沢山ある赤土である」といっており、今でも沢山ある。
- ・唐白—水受け型の唐白で土を砕く。一度入れた土は2週間搗く。この里に来ると唐白の杵の音がしている。どこにいてもこの音の木霊から逃れることはできない。12月31日の夜から正月1日だけ休んで、2日から唐白（全自動天然エネルギー土破き機）は稼働し始める。これは10戸それぞれに備えている。
- ・土づくり—砕いた土を水溜に泥とし、それを金網で漉してコロイド状に水中に浮かし、その泥水を溜めて水抜きして土をつくる。これを轆轤にのるくらいの柔らかさにするために、窯の上に乗せたり



- ① 砕いた土をこの水溜にいれ、焼物の土をつくる  
 ② 土を乾かしているところ  
 ③ 蹴轆轤（けるくろ）

- ④ 形をつくったものを天日乾燥  
 ⑤ 登り窯  
 ⑥ 登り窯の内部 奥に見えるのは火加減を見るのぞき穴

して乾かす。

- ・蹴轆轤 — 焼物の形をつくる。
- ・天日乾燥 — 雨がパラつくと、どの家も全員が、庭に干している焼く前の器を、家に入れるために、慌てて走り回る。
- ・素焼 — ここでは、あまりしない。小さいものはするが、大きい焼物は一度に釉薬をつけて焼き上げる。
- ・登り窯 — もとは共同の大きい窯を全戸で使っていた。10戸の家が8室の窯を順繰りに（公平を期するため、上下の室を移り変わっていく）使っていたのだが、今ではその窯は5戸で使っており、他の家は自家用を持っている。理由は「焼物は重い仕事だが、焼く前はもっと重くて運ぶのがかなわんのですよ」ということであった。

サイクル — 時間のサイクルのひとつは2週間である。「なぜ2週間なのか」ときいたら「10日では十分じゃない」というような返事もらった。何か深遠な理由でもあるのかと思って再度聞いたら、「いえ、十分砕かれていないと泥が浮いてこないの、土がとれないんですよ」という平々凡々なる返事。余りに分かりやすく、またまた感心した。

宗悦は月に2度も火を入れるので「日々多忙」と書いているが、昔は2週間の唐臼の周期で窯に火を入れていたのかもしれない。今では窯がふえている（各戸で持っている）ので、夏によく乾く時だと（天日乾燥）月に1回くらい火を入れ、冬期では乾くのに時間がかかるので、2ヶ月に1回くらい火を入れる。



### 〈テストピース〉

登り釜ほとんど勘で焼いているが、一度こんなことに会った。友人への土産にでもしようかと思ううるか壺（うるかはアユの腑や、子を塩漬にした食べ物で珍味である）を手にとっていたら、おばさんが「それはいいもんですよ」といわれた。小生「いいもんでどういう意味ですか」、「奥で焼いたものですから」、「奥でってどういう意味ですか」というようなやりとりから話を聞くことができた。

登り釜は最初の下から焚いて、ある程度熱が上がったら一番下の窯室を横から追い焚きし、焼けたら次の上に…というように焚いていく。この焼け具合は、勘で見当をつけることが多いが、各室ごとに覗き窓がついていて、その窓の近くにうるかつぼを置き、焼き具合を見るテストピースの代用に使っていたのである。

「いいもんですよ。奥で焼いたから」ということは、テストピースの位置ではなく、“焼き温度の高いところで焼いたもの”という意味であった。もちろん買って帰った（蓋までついた壺で1個300円である）。

### 〈小鹿田焼の特徴〉

日常生活で使う雑器である。茶碗、湯呑み、鉢、手塩皿、大皿、徳利、カメなどあらゆる焼物とっていいぐらいである。釉薬も化学薬品は使わない、セ

- ①うるかつぼ…「よかネットパーティ」のおみやげにしました
- ②バーナド・リーチ作の大皿
- ③来訪者にまかせて

イジ（緑）、アメ、クロが主体となり、「刷毛目」、「櫛目」、「飛びカンナ」の模様がついている。

この10余戸の集落の上にバスの方向転換をするための広場がある。そこに小さな市立陶芸館がある。その中に入ったところに「点灯したら必ず消灯お願いします」という札が貼ってある。つまり、「勝手に見ろ、しかしマナーを守って…」ということである。この陶芸館の中には、小鹿田焼の伝統を伺える逸品が置いてある。もちろんすべてガラスケースの中に入っているのだが、バーナド・リーチの鹿の絵皿もある。人を疑うということがないのであろうか。

この里は心も時間もゆったりと流れている。

（糸乗 貞喜）

※「やぶにらみ九州論」は今回で終了します。次号からは、九州だけでなくさらに広く目を向けて考えたいと思っています。

## おばあちゃんは満足してくれているだろうか

—宇美町原田炭鉱住宅地区の改良について—

宇美町は今では福岡市のベッドタウンとして人口が増加しているところですが、昭和30年代までは炭鉱町として栄えたところでもありました。

「福岡県産炭地域炭鉱住宅調査（平成5年）」においても本町の炭鉱住宅は約1,200戸程残っていますが、9割近くが個人に住宅・土地とも払い下げられているため、道路条件の良い妻側のみの個別建替え（通常炭住は長屋建てであるので、妻側のみを切離して建て替える）が進んでいるのが実状であります。このような炭住地区を抱える本町において、本炭住地区は、①住宅のみは払い下げられており、土地は数名の地権者であるという本町でも数少ない地区であったこと、②極めて老朽化が著しかったこと、③道路等が未整備であり、住環境としても問題地区であったこと、などから改良の機運が高まってきたようです。

このような背景のもと私どもの事務所が平成4年の2月頃からこの事業をお手伝いするようになりましたが、今期にやっと第1期目に当たる原田地区（当初の小規模炭住地区改良事業という採択要件のため2地区に分割して開発することとなった）の竣工に至り、ここにその事業の経緯や思い出話を残したいと思いません。

なお、当地区で採択した事業制度は地区内戸数概ね50戸未満程度を対象とした「小規模炭住地区改良事業（この後、制度見直し・統合があり、総合住環境整備事業、密集住宅市街地整備促進事業へと名称と要件等の変更がある）」であります。

表 主な事業概要の事業の経緯

### 〈事業の概要〉

- 地区内の従前住宅戸数
  - ・原田地区：48戸
  - ・原田第2地区：41戸 計89戸
- 計画戸数
  - ・原田地区：33戸（内4戸は原田第2）
  - ・原田第2地区：32戸 計65戸
- 階数：3階、一部2階建て
- 事業面積
  - ・原田地区：約1.1ha
  - ・原田第2地区：約0.5ha

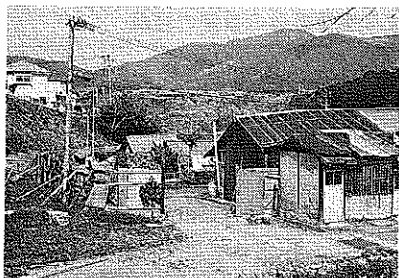
### 〈主な事業の経緯〉

- 平成4年2月～6月：基礎調査、基本計画、策定
  - 平成4年7月～11月：事業認可申請、補助金申請等
  - 平成4年12月～平成5年3月：実施設計
  - 平成5年5月～10月：補助金申請、事業認可変更申請  
開発申請
  - 平成5年12月～平成7年3月：原田地区の造成、建築
  - 平成7年9月～：原田第2地区の造成建築開始
- ※この間、原田地区で3回、原田第2地区2回の事業認可申請の変更を行う。

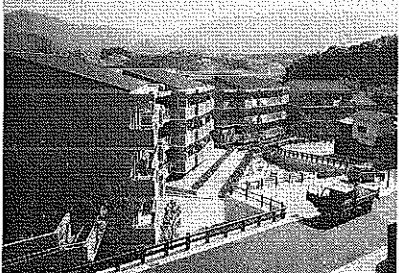
〈おばあちゃんから早く建てて欲しいと懇願された〉

調査の依頼を受け、町の担当の人にはじめて当地区を案内していただいたときの風景は、今でも私の臉に焼きついています。北斜面で日当りは芳しくなく、居室の天井高さも2.0m足らず、また軒先も波を打っている状態であり、私が見た炭住地区の中で、おそらく福岡県内においても、環境、居住条件が好ましくないという点では上位をしめるものではないかと思われました。

老朽度調査のため住宅に入った時に、居住しているおばあちゃん数人から「昨年の台風（平成3年の台風17号）は恐かった。早く、建てて下さいよ。死ぬ前に立派な住宅に入りたいね。」というようなことを云われたことを今でも鮮明に覚えています。



建替え前

建替え後（左方の  
スロープが中2階  
になっている）

〈買取等の問題で2つの地区を合わせて5度の事業認可の変更〉

主な事業の経緯の中で説明しているように事業開始以来、原田地区で3回、原田第2地区で2回の事業認可の変更を行うなど、事業規模から見ると少々難産な事業でありました。その理由としては次のようなことが挙げられます。

- ①事業認可を受けないと補償関係の調査費補助がつかないため、概ね了解の基で区域設定をしまい、実際の補償金が算出された段階で地権者の意向が変わり、土地利用の変更が生じたこと
- ②駐車場整備費が新たに補助項目に挙げられたことから、駐車場用地の部分を経地から住宅用地に変更せざるを得なかったこと
- ③事業を原田地区と第2地区に分けたことから、一方を変更すると、両方の地区を整合させるため、2倍の労力が生じたこと

④原田地区の住棟に原田第2地区の住戸を4戸併せさせたことから、地区毎の補助金申請を要し、事業費の按分など煩雑な作業が付加したこと

⑤工事においては、近隣に戸建て住宅地が接しており、また、工事中は渇水時期であったことから、埃、工事時間等を厳しく制限されたこと等

〈傾斜地を活かした住棟配置〉

当地区は傾斜地であることから、当初から段差を活かした住棟構成とすること、また、南側の隣接地及び西側の高台には戸建て住宅地が立ち並んでいるので、高台からの見おろしと周辺環境との調和を考慮して勾配屋根と瓦葺きなどをイメージしていました。

具体的には、当住棟は4つに分割されており、敷地上部の住棟へは中2階レベルからアプローチできるようになっており、下部に住棟までスロープの片廊下でつながっています。また、各住棟の敷地の高さがそれぞれ1.5m程ズレていることから直接中2階にアプローチでき、上がるのにもあまり負担を感じません。これは、地形を活かした工夫のひとつです。また、3階建住宅にしたことで、炭鉱住宅が建っていた頃と比べると大きく住環境が改善されました。それは、道路や広場など広くオープンスペースが確保され、地区の雰囲気も格段に明るくなり、居住環境もかなり良くなったことです。当初調査時点で建替を懇願されたおばあちゃんが、今どのように思っておられるか聞いてみたいものです。

最後に当事業に係わっていただいた前田設計事務所の前田氏、未来プランの竹田氏には深く感謝する次第であります。

（山田 龍雄）



## 「幸せはガンがくれた」

～地域ゼミから・川竹文夫さん

7月20日(木)に地域ゼミ、WACの合同開催として、NHKプロデューサーの川竹文夫さんに「幸せはガンがくれた」と題して話をさせていただきました。川竹さんは5年前に腎臓ガンを発病し、摘出手術を受けました。それをきっかけにガンの自然退縮や自然治癒の取材を行い、テレビ番組制作、及び著書の出版なども行っています。今回の話は健康な自分でもとても気になる内容で、聞き応えも十分でした。その概要をここで紹介します。

- ・ガンの5年生存率は高くなったというが、最終的にガンで亡くなる人は増えている。早期発見はガン患者として生きる期間が長くなっただけとも言える。
- ・もともとガンはその人の身体の不調の結果が現われたものである。ガンを切り取っても原因が続いていると必ず再発する。
- ・多くの人はガンは治らないと思っているが、自然退縮や自然治癒する人もいる。
- ・手術、抗ガン剤、放射線といったガンの三大療法があるが、それはその人の人生の結果である「氷山の一角」に触れているにすぎない。
- ・ガンを摘出した後、医者から「今まで通り過ごしていいよ」と言われた。医者はガンが生活面に関係するとは思ってない。だからいずれ再発する。
- ・人ははずれくじを引くようにガンになるわけではない。なのに誰もガンになったことで自分のことを反省していない。
- ・抗ガン剤は健康な細胞にも傷を付けるが、一方の



## 「幸せはガンがくれた」

自分自身でガンを克服した人々を取材して、川竹さんがまとめられた本

創元社 発行

- ガン細胞には免疫ができる。つまりガン細胞だけが強くなり、抗ガン剤を使うたびにガンになりやすい体になっていく。正常な細胞が傷つくことが本当の副作用。だから「抗ガン剤は増ガン剤」とまで言われる。
- ・ライフスタイルの乱れなどもガンの原因となるが、最終的には心の問題が引き金を引く。普通の人でも毎日3つくらいガン細胞ができては免疫細胞がやっつけているのだが、ストレスがたまると免疫機能が落ち、ガン細胞が増え始める。
  - ・自分も天職だと思っていた仕事がストレスになるとは思わず、いつしか心の奥底で引き金を引いていたようだ。
  - ・自分のライフスタイルを見直し、ストレスのたまらない生活を送るなど努力したガン患者は、それで自分を非常に幸せにしている。そしてガンになったことに感謝している。
  - ・免疫機能を上げるには、自分の好きなことを思ったときにやる。仕事をしてると自分の趣味はつい後回しにするが、それは良くない。実験によると、ある人は「吉本新喜劇」をみるぞ、という期待感だけで免疫が上がっていた。

- ・ガンは遺伝すると言われているが、最近の研究では遺伝と関係ないらしい。一緒に暮らしているタイプが似てくる、というのが原因のようだ。
- ・ガンになったら、医者に聞くより治った人に聞いた方がいい。(伊藤 聡)

※川竹さんが作られた番組のビデオテープがあります。  
ご希望の方にはお貸しします。(担当：富重)

### 『おい、こら！「21世紀がせまっとるぞ！』

—21世紀に向けて住民・行政・企業間のパートナーシップによる新しい県行政への模索—  
～地域ゼミ・大谷 妙人さん

〈住民と行政とのパートナーシップによるまちづくりへの取り組みのきっかけ〉

大谷さんは福岡県の住宅課に在籍していたころ、福築町才田地区での炭住改良に関わったことから、このパートナーシップによるまちづくりに取り組まれるようになったとのことでした。

この炭住改良は、計画段階から行政と住民サイドとの連携がうまくいったこと、また、従来のハーモニカ型の住棟配置を改め、囲み型配置計画とするなどの住環境の改善を行ったことによって、入居者の意識が前向きに変わったとのことでした。この炭住改良によってどのように住民の意識が変わっていったかを紹介されました。

- ・これまでは住民と行政サイドとが対立関係にあったが、立派な住宅を造ってもらったという意識から、それまでは土、日曜日に町の職員がやっていた草取りなどの作業を、住民自らが行うようになった。まちづくりを共に行っていこうとする気運

が生まれてきた。

- ・今まで返ってこなかった息子達が家がきれいになったことで盆、正月にはどっと返ってくるようになった。
- ・住環境がよくなったことによって、住んでいる方が元気になってきた。

〈自主研究グループを結成〉

上記の炭住改良のようなことがきっかけになり、平成6年には、『共生社会に向けて「22世紀の語り部へ』と題し、大谷さんを中心とした県職員による自主研究グループが発足し、「共に豊かに生きる」ことの意義について環境問題、高齢者福祉問題、あるいは、まちづくりなどに関する研究が行われてきました。

〈宮田町如来田地区でのまちづくり活動〉

福岡県宮田町如来田地区に、10年ほど前モータル類似施設の建設計画が持ち上がった時、地区住民が「如来田の環境を守る会」を組織、建設反対運動を展開し建設を断念させた経緯があります。これをきっかけに、既成市街地としては本県で初めて建築協定を締結したということです。さらに地区の住環境を良くしていくために大谷さんのグループは、地区住民の方と一緒に、住民総会や講演会等を行っているとのこと。参加者は地区の内外に及んでおり、県内のまちづくりの情報の発信源となっています。

また、大谷さんはまちづくりを行う上で、これまで県行政として欠けていたものとして3つのことを指摘されました。

- ①行政組織間、住民間、住民と行政間の情報網整備(ネットワーク)
- ②行政が打ち出した政策の点検(フィードバック)
- ③住民参加の政策づくりに向けて、行政と住民が十分に話し合った上での政策、事業手法の選択(イ

ンフォームドコンセント)

〈グラウンドワークトラスト (GWT) の紹介〉

こうした活動のなか、大谷さんはイギリスを発祥とする「グラウンドワークトラスト」(以下GWTという)に出会ったそうです。

昨年、イギリスの旧産炭地の「マーサー&カノン・GWT」を訪れ、その時の模様をスライド等を交えながらお話いただきました。

ここでは、失業率70%、少年の非行率30%を抱える公営住宅団地の環境改善を町内会づくりから始め、大人が青少年と共にボランティアや雇用トレーニングを行うなど、GWTは地域の活性化に密接に関わっているとのことでした。

産炭地を抱える筑豊地域の活性化を図る上においても大いに参考になると思われ、今後、この研究を進めていきたいとのことでした。

GWTの概要は以下のとおりです。

- ・ナショナルトラストと違い、住民・企業・行政とのパートナーシップを通して地域の環境改善を目指すものであり、住宅改良をはじめ、荒廃地の整備、植生地の復元、産業廃棄物除去など広範な活動を行っている。
- ・独立した非営利団体であり、1993年現在で事業所が30箇所できている。一事業所のスタッフは平均10名程度であり、コアスタッフ4人と、ボランティアで運営している。
- ・財源は国や自治体からの助成金、各種企業や個人からの出資金及びわずかながらの収益事業から成り立っている。「マーサー&カノン・GWT」での1992年度の事業費は約3億3千万円であり、その中身は給与等人員費が約8千万円(24%)、プロジェクト費用2億2千万円(67%)、他3千万円(9

%)である。

・企業や行政が手の出しにくいリスクを伴う事業を行う。それは、成果よりも到達するまでのプロセスを重視する。

この日は、大谷さんのお話が終わった後も、大谷さんとともに「ボランティア」、「高齢者問題」等について考えました。

おいしいお酒も手伝って、喧々囂々と意見が飛び交いにぎやかな地域ゼミとなりました。

(山田 龍雄・金川 薫)

「住み慣れた場所に小規模ホームが理想です」

～WAC研究会から・下村恵美子さん

「痴ほう症になっても自分らしく生きてほしい」と、福岡市中央区地行で手づくりの介護施設を運営なさっている「宅老所よりあい」代表の下村恵美子さんを講師に迎えました。

〈ぼけというものに対する見方は〉

「生き生きジャーナル」別刷(医学書院)から



唐人町商店街へ。近所ということもあって「ばあちゃんたち、元気ねえ」の声援があります

「ほけにならないためには…」を叫んだ本がずらり並んでいたりすると、ほけになることは普通の人間ではなくなることであり、恐ろしいという感情を抱きかねない。また、ほけは人を困らせる病気、年を取っても一番なりたくない病気など、一般的に良い印象はあまりない。

〈下村さんの世界は〉

「母方の祖母がほけ、お世話をするのが私をはじめとする孫たちの仕事となった」ことがきっかけとなる。

「祖母の頭の中には過去へいけるタイムマシンがあるのだな」と思っていたようだ。また、「天候、健康状態にもよるが、祖母は自分の一番華やかな時代を呼び起こすことができ、そんな祖母は少々羨ましい存在だった」という。

下村さんが老人介護に興味をもった理由は、「祖母の世界を覗かせてもらって楽しかった」ことにあるようだ。祖母の世話をしなければという気持ちはだんだん薄れ、祖母といると楽しいと思ひ、やがて、祖母＝お年寄りといると楽しいと思う気持ちをもったのではないかと思われる。

そんな下村さんが考えるほけは、「高齢になるにつれ、体中のあらゆる組織が衰え始める。それは、誰もが経験し歯がゆい思いをするものだが、ほけも全く同じこと。それが手であるか脚であるか、あるいは頭であるかという違いだけ」である。

〈「宅老所よりあい」は〉

福岡市中央区地行というところ、福岡ドームを連想するが、「宅老所よりあい」はここにある。

現在、専任の職員7名とボランティア60名に支えられている。しかし、ボランティアは食事を作ることで参加してもらい、その他のことは、職員で行っ

ている。「誰だって、見慣れない人におむつを替えてもらったり、お風呂に入れてもらったりするのは気持ちの良いものではないものね。それと同じ。」というものの、そこには下村さんのプロとしての意識、感性がうかがえる。

利用者が増えたため、ある寺の茶室から場所を移した。築70年の家を宅老所よりあいとして使えるように改築するには500万円かかり、バザーで300万円、行商等で100万円、募金で100万円を4カ月で捻出したとのこと。

現在では30数名のお年寄りが登録、1日平均13～14名が利用している。

〈開設から3年半、新たな一歩は〉

「近所のお年寄りの友達の家に立ち寄ったという雰囲気大切にしたい」、「自分は今どこにいて、どうしようとしているのかといったことが分からなくなっても、記憶につながるものに包まれていれば、それがきっかけとなることもあるかもしれないから」という思いやりから、部屋は古いタンスや置物、遊び道具で埋められている。

活動中の写真をみせていただいたが、お年寄りの顔色、表情の豊かさが、「よりあい」への想いを語っていた。そして、「さあ、肩の力をぬいてごらんよ」と私にささやいてくれているようにも思えた。

今年、2つ目の宅老所を南区西長住に開設した。長住地区周辺の痴ほう症のお年寄りを抱える家族が「よりあい」の考え方に賛同して開設準備を支援、実現への運びとなった。

介護のあり方を問い続ける試みがここでも始まっている。

(伊藤 加奈)

## 中国見聞食日誌

～北京・方庄住宅団地視察・天安門広場・故宮博物院・北京下町（北京ダックを味わい京劇をみる）・北京ぶらぶら・万里の長城～上海・「和平飯店」のジャズバンドを楽しむ・豫園・黄浦江遊覧～浦東新区工場団地視察

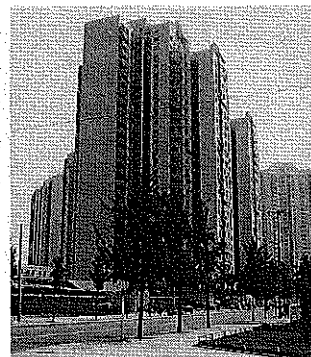
当社では、7年程前から海外セミナー旅行を企画しており、韓国、香港、シンガポールに続いて、今回は、2年ほど前に、大阪のAII（アルバックインターナショナル）で仕事をされていた楊林さん（現在、北京在住）に案内役をお願いして、6月22日～27日の5泊6日で中国北京・上海へ行ってきました。

### 〈方庄住宅団地視察〉

我々が北京でまず最初に訪れたのは、日本で言えば市の住宅供給公社とほぼ同じ機能を持った「方床物業管理有限責任公司」という機関の事務所でした。

この会社が管理している方床住宅区についてご報告します。

- ・敷地は300万㎡（容積率200%）、4つの住宅区で構成され、1つの区が13に分割されている。さらにそれぞれが15の組に分かれており、住戸数1万6千戸、約6万人が居住している
- ・200万㎡が住宅、残りは公的施設で、熱工場、汚水処理場、老人マンション、小学校、中学校、幼稚園がある
- ・地区内で文化センターやスポーツセンターの建設などが計画されている
- ・地区内には4つの路線バスが走り、天安門まで7kmと近く、立地条件は極めて良い

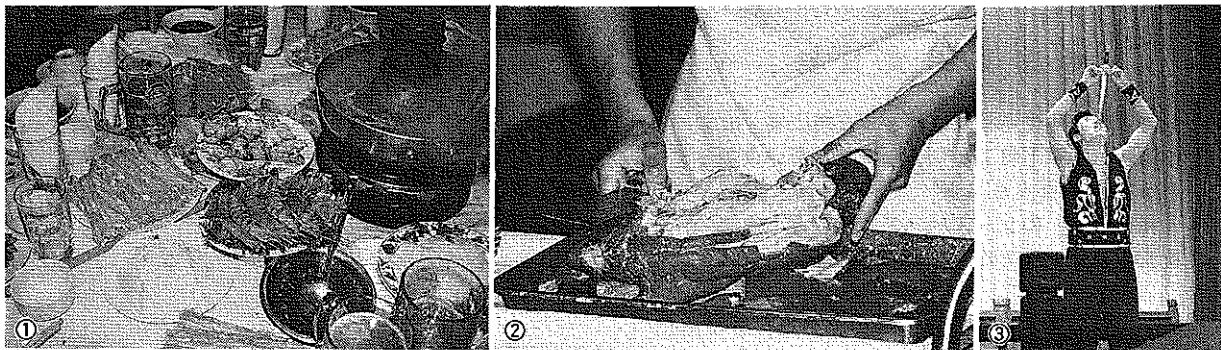


そびえたつ高層住宅

- ・特色としては、緑地の整備に積極的で、1人当たり2.6㎡の緑地を確保している
- ・入居状態をみると、80%が社宅として企業が購入、2%が個人に分譲、18%が賃貸となっている。賃貸には、この住宅地が開発される以前の地権者などが入居している
- ・分譲価格は日本円にすると500～800万円（居住面積は80㎡換算）と極めて高価である。日本と中国の所得差が10～15倍と考えられるので、日本の感覚では億ションというところであろう。
- ・賃貸住宅の家賃は日本円で400円/月（80㎡換算）と比較的安価である
- ・老人マンションの家賃が10,000円/月と高いが、ホテル並みの設備、サービス、医療施設が整っている北京市は、周囲からの流入人口も多く、このような住宅開発も盛んに行われています。この会社だけでも、北京市だけで4、5件計画中です。これからどんどん変化していく中国の勢いの一部を垣間みたような気がしました。

しかし、全ての住宅が入居済みのため、実際の部屋の内部などを見ることが出来なかったことが少々心残りでした。

（金川 薫）



- ① 羊のしゃぶしゃぶ—中国語で「涮羊肉」、雰囲気伝わってくる文字です  
 ② 本場の北京ダック、あざやかにさばかれて、またたくまに皆の胃の中へはいりました  
 ③ 天橋楽茶園で見た“ナイフを飲み込む芸”、すでに半分くらいを飲み込んでいます

### 〈家鴨三昧—北京ダック〉

北京の2日目は晴天、といっても北京は砂ぼこりとスモッグで青い空はまるで見えない。この日の午後は、天安門広場、故宮等を見学して、歩き疲れたところで、人力三輪車に乗って繁華街へ戻る。真っ黒に陽に焼けたお兄さん（おじさん）が、がむしゃらに自転車を漕いでくれるのだが、混雑した車の隙間をぬって走るの、スリル満点だった。

さて、夕食だが、初日の夕食に羊のしゃぶしゃぶを味わったので、2日目にはどうしても北京ダックが食べたいという、たつての願いが聞き入れられて、北京ダック専門店「全聚徳」へ行った。北京には、マクドナルドやケンタッキーフライドチキンに並んで北京ダックのファーストフード店もある。

ワゴンにのせた照り輝く家鴨の丸焼きが運ばれ、調理人がその場で皮をナイフでそいでくれる。それをネギと味噌と一緒に包んで食べるが、皮がかりっとしてとても美味しい。あっという間に2匹の家鴨は私たちのお腹へ入ってしまった。他にも、家鴨の心臓、水掻き、顔などの料理があり、この日は家鴨

三昧だった。

### 〈中国の嘉穂劇場？ 伝統的中国娯楽—京劇〉

北京ダックを食べた後は、中国の浅草みたいなどころというふれ込みで、京劇を観るために歩いて「天橋楽茶園」へ向かった。

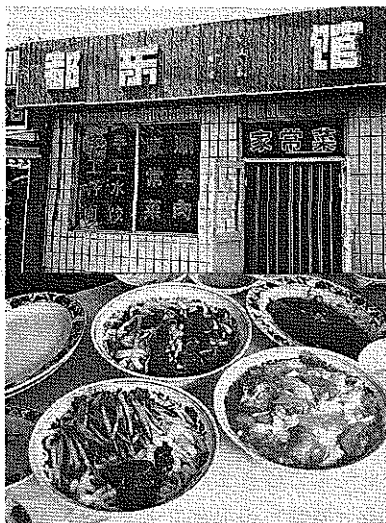
我々の席は、最前列で、ジャスミン茶と揚げ煎餅、ひまわりの種等のお菓子がついてきた。客席を見回すと、ほぼ満席で、料金の高い前列付近は、日本人や欧米人の観光客が占めていた。

この劇場では、「西遊記」や「三国志」など長い芝居をするのではなく、ナイフを飲み込む芸、中国特有の頭の先から突き抜けるような声で唱う歌、踊り、漫才らしきもの、立ち回りのある芝居など盛りだくさんの内容で、中国語がわからなくても十分楽しめた。劇場の大きさ、客席の雰囲気は、まるで以前観た飯塚の嘉穂劇場のようであった。（歌丸 星子）  
 〈タクシー運転手の立ち寄る食堂は中国も日本も間違いのないようだ〉

北京の3日目は自由行動ということで、私と所長の糸乗、それに旅行中ずっと案内していただいた楊さ

上：タクシーの運転手に案内してもらった店。「涮羊肉」(しゃぶしゃぶ)の文字もありました

右：注文した手打麵



んの3人は「市内ウロウロコース」ということで、市場や四合院住宅などを見学し、涼みもかねて入ったホテルでちょうど昼時となった。3人の意見で昼は軽く麵類がよいということにまとまり、ホテルのドアボーイに尋ねていると、近くのタクシー運転手が近づいてきて、「いつも利用している手打ち麵の店がいいよ」といって案内してくれた。

店はテーブルが4~5つ程並べてある飾り気のない雰囲気であった。とりあえずビールと炒め物を5品ばかり注文したが、特に「ニガウリととうがらしの炒め物」、「じゃがいもの炒め物」、「豆腐」などは中国の家庭の味といった感じであり、極めて美味であった。

この後、3種類(トマトと卵とじ風、ジャージャー麵風、醤油味のほうれん草入り風)の麵が来たのであるが、3人とも満腹状態で半分ぐらい残してしまった。ここのオーナーは30歳前半の女性の方であり、ひとりで手打ち麵と調理すべてを受け持っており、いか

にも働き者といった感じがした。

中国でも、NHKのテレビドラマ「おしん」が好評で、成功した女性のことを“おしん”と呼ぶということであった。放送後、既に北京でウエートレスから成功した中華料理店のオーナーがいるそうで、楊さんの意見では、この店の女性オーナーが第2の「おしん」になるかも知れないとのことであった。

(山田 龍雄)

〈浦東新区工場団地視察～着々と建設される高層ビル群を見る〉

5日目、上海浦東地区の工場団地を視察しました。上海市浦東新区経済貿易局の洪志華氏に投資環境や発展の見通しについてうかがいました。

- ・上海浦東新区は黄浦江の東、揚子江河口の西南に位置し、上海市街区に近接する三角形の地域で、面積は約518平方キロメートル、人口は138万人である
- ・上海市浦東新区の開発・開放は、揚子江デルタ地域と揚子江流域全体の経済の新たな飛躍を促進することを目的として1990年4月にはじめられた
- ・現在の投資カ所は326、投資額は7億ドルである
- ・道路交通においては、地下鉄、埠頭、空港、鉄道、水路運輸を発展計画にもりこんでおり、このほかにも中央政府をあげてのインフラ整備が予定されている
- ・浦東新区の優遇政策は徹底している。例えば、‘五免五減半’は、すなわち最初の五年間は企業所得税の免除、六年目から十年目までは事業所得税の半分を減税するということである
- ・当地区の北側には現在2,000m級滑走路4本をもつ国際空港を建設中であり、1本は、1998年に竣工する予定である

車窓からまちを眺めてみたが、目に飛び込んでくるのは建設中の高層ビル群ばかりでした。

一年後、いや少なくとも三年後には大変貌することを願ってこの地を後にしました。(伊藤 加奈)  
〈上海にて幸せな気分を味わう～「和平飯店」のオールドジャズバンドを楽しむ〉

上海で宿泊したホテルは、市街地内を流れる黄浦江の近くに位置し、市内のランドマークとなっている「和平飯店」だった。このホテルは租界時代に建てられたクラシックなホテルであり、10坪以上あったと推測される部屋にシングルで2泊した。この和平飯店の1階にはバーがあり、オールドジャズバンド(高齢者のみで構成されたジャズバンド、中国語で老年爵士楽団)のライブが行われている。

早速、上海一日目の夜、食事、カラオケの後に上海ジャズを聞きにいった。ちょうど、この日はバーに入った時間帯が良く、オールドジャズメンの方々の演奏を聞くことができた。オールドジャズメンの方の演奏のあとは中年クラスのメンバーに変わるみたいで、後継者がちゃんとできているようであった。ここではリクエストメニューから40元(日本円で450円程度)で好きな曲を注文することができ、「昴」、「北国の春」、「さくら」などの日本の曲も演奏してくれる。

また、性懲りもなく次の日の夜も聞きにいくと、悦に入った男女組や女性二人組がステージの前で演奏に合わせて優雅に踊る雰囲気もこの場所にフィットしており、幸せな気分させてくれた。

また、今度来るときには、誰かと2人で訪れたいと思わずにはいられなかった。(山田 龍雄)

## 食場日誌



大根の薄切りでつばみ、ししとうでガクを表現した花

7月×日…久留米大学御井学舎の近くに正源寺があります。豆腐の上の紅葉の葉で季節感を味わい、細工した花を目と舌で楽しみながらいただきました。

味の方にはいうまでもなく、素材への演出や、本来料金には含まれないところ(庭、器、箸袋、般若湯〈酒類〉の温度など)には一層の、細やかでさりげない心づかいを感じて、ここでの精進料理は、カラダよりもココロへの栄養となりました。(な)

7月×日…鹿児島からのお土産「薩摩さんつば」に大喜び。鹿児島にはさつまいものお菓子がたくさんありますが、これはなかなかのものでした。いも餡に黄、紫、橙のさつまいもが使用されていて、あざやかな色がとてもきれいです。少々甘さが強いかなとも思いましたが、濃いお茶と一緒にいただくともう最高、幸せなひとときをすごしました。(け)

7月×日…ももちの「カーニバルプラザ」がオープンしたので行ってみた。ひとり3千円でお腹がいっぱいになったのは満足だった。メニューはいろいろあるが、メインはカニ。大阪のカーニバルプラザは、古い建物を活用していたため、雰囲気がなかなか良かったが、こちらは大きなテントの中で、ワイワイ、ガヤガヤ、子供向けの遊具が入り口に配置されていたり、大勢でいくのには良いかも。(べ)

7月×日…小鹿田での話。集落の中程に「山のそば

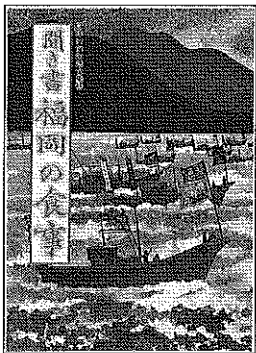


茶屋」という店がある（小鹿田で他所ものが食事できるのはこの店のみ）。細くて格好のいいコシのあるようなそばではなく、もさもさした手打ちの、そばの香りがするものをたべさせる。

私はそこではいつも、ざるそばとダゴ汁を食べることにしている。ダゴ汁ではあるが、大分県ではダゴ汁といい、書く場合もダゴ汁と書く方が多い。

これは残念ながら戦中戦後の代用品としてのダゴ汁のようなものではなく、極めて美味である。他にも地鶏そばとかいろいろある。この焼物の里まで、焼物ではなく、そばだけを食べに来る人もいるのである。

(い)



聞き書

## 「福岡の食事」

「日本の食生活全集 福岡」  
編集委員会 編  
(社)農山漁村文化協会 発行

「何か面白そうな食べ物が載ってないか・・・」と思って何気なく買ったのが、この「日本の食生活全集」。現在、福岡版、長崎版、沖縄版の3冊を手に入れている。この本に載っている食べ物や調理法は、農山漁村で地元の人々に対する取材（聞き書）を通じて紹介されており、この本は地域の食文化の一種の博物誌ともいえる。

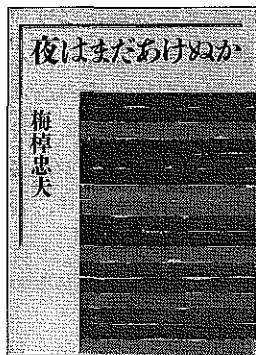
近年、我が国では「多国籍化した食材と料理」が

一般的になっており、一方で、今まで地域に根付いていた食文化がだんだん受け継ぎにくくなっていることは事実であろう。だから、この本は、その忘れられつつある地域の食文化に対するエールのようなものである。それだけに、この本では各料理や調理方の紹介記事には写真がふんだんに使っており、地元の人でなくても理解できるよう気遣われているようだ。写真もひとつひとつの料理の地の色を損なわないよう正直に丹念に撮られている。

印象的なのは食事の見出しがふるっていることで、「かます茶漬けを食べぬと夏が過ごせぬ」（豊前地方の紹介）、「郊外へ摘み草にしろうお（白魚）を味わう」（博多の春の紹介）、「なまずご飯で秋の夜長を味わう」（筑後川流域の紹介）など、一種の俳句のような雰囲気（と思うのは私だけ？）。

食べに行きたいと思っても、お店ではなかなか出してもらえないような料理だとわかるだけに、食べ物好きの人ならば、何とかしてその地域にコネを作って一度は腹に納めたいと思うかもしれない。私も、かます茶漬けやなまずご飯など、今まで25年間口にしたことがないから、一度でも口にしたいと思うのだが、これからもその地域に婿入りでもしない限り食べる機会は一生涯ないだろうなあと、ため息ばかりついている。

(尾崎 正利)



## 「夜はまだあけぬか」

梅棹忠夫 著  
講談社 発行

本書は、1986年3月、突然に両眼の視力を失ってしまわれた梅棹さんの日々の出来事や思いが書かれたものである。闇の世界の中でいったいどんな事を考えていらっしまったのだろうか。そんな興味で読み始めた。

長年にわたって民族学、比較文明学を研究され、その成果を著してこられた方にとって「読むこと、書くこと」ができないことは、どんなに苦しくつらいものであつたらうか。さらに、入院される直前まで、著作集の準備をされていたということである。それまでの研究活動の集大成をなすべき時に、このような不幸な事態に見舞われたのである。「わたしは人生の収穫期にさしかかっているであろう。労働を楽しみながらではあっても、成果はたわわにみのっている。それをいよいよ刈りとろうというときに、手も足もでなくなったのだ。わが人生はこれでおわつたのか。」ここにはやはり深い悲しみと絶望が感じられる。「不安は夜中にあらわれるのである。夜中におこる不安というのは、ちょうど胸から腹にかけて、だだっ子をだいているようなものだ。その子が泣きわめく。」いつまでもあけない長い長い夜の闇の中で、不安にさいなまれていた梅棹さんの思いは、本書の題名「夜

はまだあけぬか」に集約されているように感じた。

しかし、このようなつらい体験のなかでも、何かをなそうとする梅棹さんのバイタリティは驚くべきものである。語学、音楽などの異分野の勉強、そして仕事においても口述筆記による執筆を始められ、ついに著作集にも取りかかられている。もちろんまわりの方々の協力も必要だが、何よりも梅棹さんの強い思いがあつてのことである。何ものにも屈しない、梅棢さんの前向きの姿勢にはただ感嘆するばかりだった。

(富重 慶子)

## 私の近況

## 〈情けに報いる〉

「情報」という言葉は、「情けに報いる」ことであるのに気づいたのは入社してからであるが、最近のパソコンネットやインターネットなどの情報ネットワークの本を読んでいると、随所にその点が強調されているのに気がつく。情報にアクセスする際の礼儀、情報をもらったらなんらかのレスポンスをすること、また相手の迷惑にならないようにすることなど、今や大衆のものとなったネットワークは、規制というよりは活用する個々人の良識、モラルにその将来は委ねられているような気がする。

中国に行ったとき、いろんな人を紹介してくれた楊さんが、話をしてくれる相手の人とタバコをすすめあっていたのも、中国流の人的ネットワークの維持の秘訣かなと変に感心してしまった。

(ベ)

## 〈豆田の街並みを散策〉

暑い一日、昔ながらの家や店が並んでいる日田市の豆田を歩きました。ひと休みした喫茶店は140年

経った商家を改造したものと  
のこと。磨き込まれた太い柱  
や古時計など、ほっとするも  
のがいっぱいでした。注意し  
ないところげ落ちそうな階段  
を見て、小さい頃、いとこた  
ちと遊んだ母の実家を懐かし  
く思い出したりもしました。  
もう一度ゆっくり歩いて今度  
は資料館や史跡なども見学し  
たいと思います。(け)

〈小鹿田に行ってきました〉

ここに伝わる小鹿田焼は、いくつもの手仕事をく  
ぐってつくられた製品であることが伝わってきます。  
全くどんな形容詞を並べて表現したらよいか分から  
ない、華やかさはないものの、育ちの良さが感じ  
られました。

私たちの先祖は風と水の流れに敏感で、風をおさ  
め、水を得る地を選んで住みついてきたといいますが、  
まさにそうして選ばれた地である予感がしました。  
(な)

〈来訪者の気分を全く無視し団体観光のワクにはめ  
てしまう観光施設、鹿児島「本場大島紬の里」〉  
先日鹿児島を訪れた折に、タクシーの中で大島紬  
の話が出て(大島出身の運転手さんだった)、泥染め  
の大島を見てみたくなった。1時間たらずの時間があ  
ったので、“ひよっとすると藍でも買ってしまいかも  
しれんなあ”といった気分を少し感じながら「本場  
大島紬の里」というところにいった。

買うと決めているわけではないので、「紬を見せて  
ほしい」といったら、「庭を見ていただきますので、  
入場券を買って下さい」といわれた。「庭は見なくて



豆田で見つけたお風呂  
屋さんの看板

もいいから」といっても「いい庭ですからどうぞ」と  
勧められた。暑い時節でもあり、近道を教えてもら  
って、400円を払って急いで見て回ったが、反物を置  
いている売店まで辿りつかなかった。

客が来たら「こういう通りに動かす」というマニ  
ュアルがきまっているようだ。それも団体観光を前  
提にしているようで、一人で行くとひどい目に会う。

もっと多様でフレキシブルなサービスをしないと、  
今の時代ではもたないのではないかと思う。

私は売り場まで行けなかったので、大島紬を見る  
こともできなかった。私の使った金はタクシー代と  
入場料400円のみである。(い)

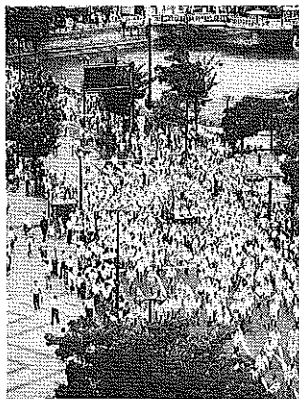
#### おしらせ

(「うらしま太郎」を行ないます)

WACの地域単位クラブ「長寿社会のまちづく  
り研究会」では、10月5日(木)から、「先端技  
術フェア'95 in 九州」の「高齢社会福祉に向  
けた最新機器ゾーン」で高齢者疑似体験「うらしま  
太郎」をおこなうことになりました。

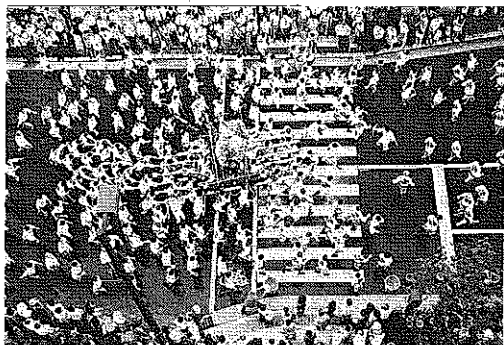
他にも展示、講演、新製品・新技術発表会、交  
流会など、たくさんの催しが予定されています。  
ご都合がよろしければ、是非おでかけください。

- ・名 称 先端技術フェア'95in九州
- ・テーマ テクノが拓くアジアの中の豊かな九州
- ・期 間 平成7年10月5日(木)～7日(土)  
10:00～17:00
- ・場 所 マリンメッセ福岡  
(福岡市博多区沖浜町7-1)



左：中洲の橋を渡ってくる  
“山”

下：事務所の下を走る“山”



〈1995年7月13日、うちの事務所から撮影しました〉

博多祇園山笠は、承天寺の開山聖一國師が疫病退散のため施餓鬼（セガキ）棚に乗って聖水をふりまいて博多の町を回ったのが始まりだと言われています。

7月1日の飾り山笠の公開から、12日の追い山ならし、13日の集団山見せ、15日の追山笠までの15日間です。13日だけはこうして、事務所のある天神方面にも山を見せにきてくれますから、ここでは毎年見られる光景となっています。祭りのクライマックスである15日午前4時59分からの追山では、かつぎ手は見物客の「オッショイ、オッショイ」の掛け声

を浴びながら、決勝点までの約4kmを疾走し時間を競います。

今年は休日と重なって75万人の見物客があったそうです。  
(な)

### 編集後記

■ 今回のよかネットに掲載している第37回地域ゼミ「幸せはガンがくれた（川竹文夫氏）」での話は、日頃から飲む回数が多く、不摂生な生活をしている私にとって、考えさせられるものでありました。人に感化されやすい私は、このゼミの影響で、仕事の後「みんなで免疫を高めに行こう」と言っただけは所員をビアホールなどに誘い、瞬間的に免疫を高めています（この免疫論は9頁をご覧ください）。ちょっと一杯のつもりが梯子酒では、免疫効果も帳消しのようです。

■ また、「肉」は肝臓や脾臓に負担がかかるということであったので昼食もできるだけ「魚」に切り替えている今日この頃であります。  
(だ)

よかネット NO.17 1995. 9

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-962-1224

東京事務所

TEL 03-3226-9130